# 岡山・御所（ごしょ）遺跡

**1** 所在地　岡山県総社市金井戸

**2** 調査期間　二〇〇四年度調査　二〇〇四年（平16）一二月～二〇〇五年二月

**3** 発掘機関　総社市教育委員会

**4** 調査担当者　武田恭彰

**5** 遺跡の種類　官衙跡

**6** 遺跡の年代　弥生時代後期～古墳時代、平安時代後期

**7** 遺跡及び木簡出土遺構の概要

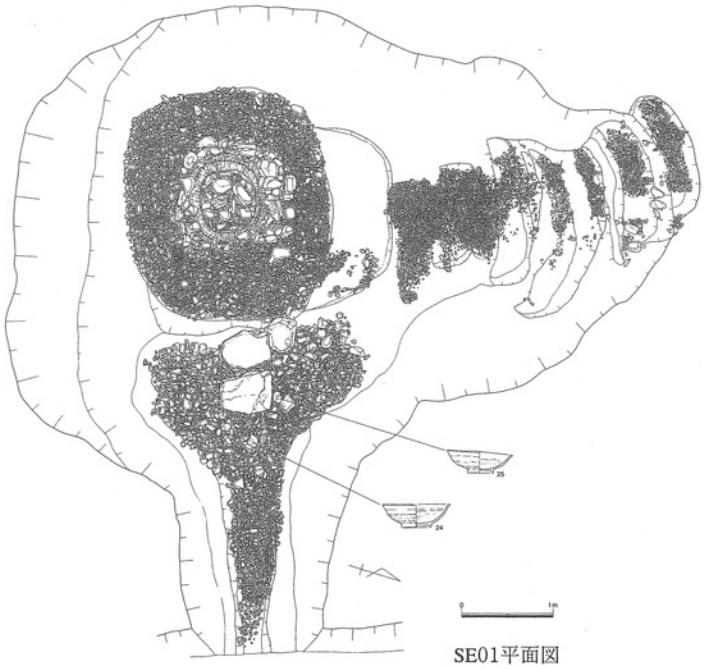
御所遺跡は弥生時代後期から平安時代にかけての複合遺跡で、高梁川左岸に広がる総社平野のほぼ中央に位置する。北に仰ぎ見る吉備高原南端の山塊には、古代の山城鬼ノ城が築かれている。御所遺跡一帯は、『備中国賀夜郡服部郷図』などによって、従来から備中国府の有力な推定地の一つとされてきた。

（岡山北部）

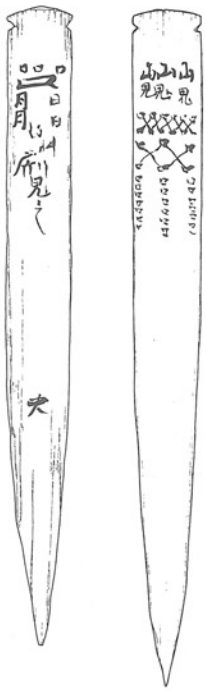
今回の一連の発掘調査は、平野を南北に流れる小規模河川国府川の改修工事に伴うもので、二〇〇四年末から工事対象部分で順次調査を実施し、二〇〇六年度も継続している。これまでの調査で、遺跡の立地する微高地には弥生時代から古墳時代までの集落跡が確認されたものの、七世紀から一〇世紀までの遺構・遺物は皆無であるが、一一世紀初頭に外周に大溝をめぐらせた一辺一二〇m以上と推定される方形居館が造営されたことが判明している。

二〇〇四年度調査は、国府川の流路に平行して実施される掘削工事に伴い、南北約五〇m東西約一〇mの約五〇〇$m^2$について実施した。調査地は、前述の方形居館の東南隅から東辺に相当する。調査の結果、大溝の屈曲部・土塁・梵鐘鋳造土坑・柵列のほか、呪符木簡二点が出土した井戸SE〇一が検出された。

井戸SE〇一は、方形居館の東南隅に相当する大溝の屈曲部内側に位置している。井戸の掘形は直径約六mの不整円形で、検出面から一・六mの底面に礫を敷き詰め、中心に直径一・二mの大木を刳り抜いた井戸枠が設置されている。また東辺の大溝に続く排水路にも礫が敷かれているほか、北方向には基盤層を整形し砂利を敷いた一一段の階段状通路が付設されている。二点の木簡は井戸枠に接して東西に向き合う状態で立てられて出土した点からみて、井戸の埋め戻しに際して埋納されたと思われる。井戸の廃絶時期は居館が廃絶する一二世紀末葉より若干先行すると考えられるが、詳細は検討



SE01平面図



(1)　(2)

中である。

特異な構造の井戸や大規模な溝、大量に廃棄された供膳具の土器などの遺構・遺物の発見によって、御所遺跡は少なくとも平安時代後期には備中国府として機能していた可能性が高まったといえよう。

**8**　木簡の釈文・内容

(1)　「V（符籙）」　427×44×4　033

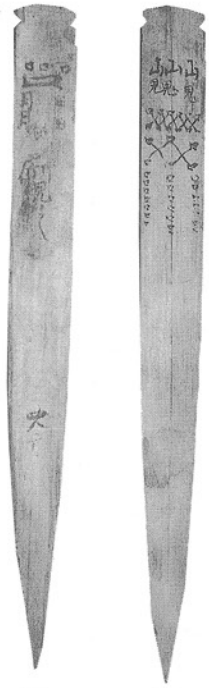
(2)　「V（符籙）　□」　403×39×3　033

(1)(2)ともに呪符木簡である。残存状態は良好で欠損はみられない。上端は水平ではなく、特に(2)は緩く尖らせている。(2)は符籙のほかに一文字が確認でき、「急々如律令」の一部の可能性があるが、明瞭ではない。

**9**　関係文献

総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』一四（二〇〇六年）

（武田恭彰）



(1)　(2)